

連載

# これからの 情報処理学会

— 第 12 回 —

## IPSJからJをとろう

水野  
忠則

静岡大学創造科学技術大学院  
情報処理学会監事

### 情報処理学会と国際化

International Federation for Information Processing (IFIP: 情報処理国際連合) は、1960年4月、国連ユネスコの提案で組織された情報処理国際連合であり、我が国がフルメンバとして、IFIPに加盟するために同年に情報処理学会が創立された。この経緯もあり、情報処理学会は、IFIPを支える組織であり、日本の領域を分担する役割がある。

しかしながら、設立のための深い関係はあるものの、現時点ではIPSJとIFIPは独立した組織であり、上下関係は存在しない。IFIPのアメリカにおけるフルメンバが、Association for Computing Machinery (ACM)とIEEE Computer Societyであり、どちらもすべて対等となっている。

では、情報処理学会は、国際の場でどのような位置づけで、活躍できるのだろうか。

国際の場で活躍する情報処理学会の役割としては、1つは国際標準化であろう。これに関しては、情報処理学会の中に情報規格調査会が存在し、ISO(国際標準化機構)を中心に長年にわたり活動してきており、当学会において、主要な役割を占めている。

この活動は、「国際標準化機構 (ISO)、国際電気標準会議 (IEC) などの情報技術に関する国際規格の審議およびこれに関する調査研究、国内規格の審議などを行い、情報処理および電子計算機に関する標準化に寄与すること」を目的としており、日本からの情報発信の1つの柱となっている。

もう1つの柱が、国際会議の開催である。科学技術は、日本国内だけに閉じることはあり得ないので、日本から、外国の国際会議に参加したり、逆に外国からも参加して、日本で国際会議を開くことになる。

長年、情報処理学会において国際会議を開く場合、IFIP、ACM、そしてIEEEに協力する共催のかたちで開催してきた。私自身、IFIP TC6 WG6.1の下で、数回海外で開催された国際会議に参加し、プロトコルの形式記述に関する国際会議を日本においても2回行った。この場合、IFIPの国際会議を情報処理学会が共催のかたちで開催した。また、IEEE主催の国際会議として、ICDCS、ICPPなど数多くの国際会議が日本で開催されている。

今回提示する問題提起は、「どこまで、情報処理学会が主体で行うことができるか」である。自立した組織

であり、世の中がグローバル化している時代において、IEEE、IFIP、ACM等の活動支援をするだけでよいかということである。

情報処理学会は、昭和35年(1960年)の設立以来、発展する情報処理分野で指導的役割を果たすべく活動している。しかしながら、それは日本における指導的役割で、国際の分野においては、どうであろうか。

IFIPとの関係については、本会のWebページ(<http://www.ipsj.or.jp/10jigyo/iinkai/IFIP/ifip.html>)において記載されており、「積極的にIFIPの場を活用し貢献することが必要である」としている。IFIPの場を活用とあるが、本当にそれだけで良いのであろうか。

インターネットの活用が不十分であったときは、国際会議を開くことは、費用、事務連絡などの面から見て、きわめて大変な作業が必要であり、企業に対しても寄付金をお願いしないと、なかなか実現できなかった。しかしながら、現代、その気になれば、国際会議をIFIP、IEEE、ACMの力を借りなくても、電子メール、Web、これらのテクノロジーを使用すれば、国際会議開催が可能となってきた。

---

## IPSJのJ

---

国際における情報処理学会というものの位置づけを考えてみる。日本語では、情報処理学会、英語では、Information Processing Society of JapanとJapanが付いている。英語をそのまま訳せば、日本情報処理学会となる。当然、日本の国内における活動においては何ら問題は生じない。

しかしながら、国際会議を行うとなると、これが問題となってくる。国際会議を日本の国内だけで行う場合は、何ら問題は生じない。日本人のために、日本人が世界に開かれた国際会議を開催するもので、発表者も日本人がかなりの比率を占めるからである。

国際会議を行う場合は、いろいろな国から参加者がいる場合、当然の流れで、各国持ち回りでやりましょうということになる。そして、その国際会議の主催者はどこ、誰になるかである。IEEEとか、ACM、IFIP、それぞれは、当初から国際でのアクティビティを前提に作られており、名称も国の名称をつけていない。このため、IEEEに日本の情報処理学会が共催した場合、グローバルなIEEEが日本で国際会議を開催するために、ドメスティックな情報処理学会に支援をお願いし、共催しても特に問題は発生しない。

国際化、グローバル化が必要となっているときに、我々の学会は、日本ドメスティック対応となっている。情報処理学会は、誰のために存在するのであろうか。日本人のための、日本人による学会なのであろうか。

私の所属する静岡大学創造科学技術大学院では、工学、理学、農学、情報学が融合したかたちで構築されており、それぞれの分野の特性が出てくる。たとえば、インパクトファクタがない論文は、学位取得のためにジャーナルと認めないとか、日本語の論文など、論文ではないとかいう声が結構上がってきている。情報処理学会の論文誌はほとんど日本語である。一方、我々情報処理の分野は、他分野に比べ、国際会議での発表が非常に多い。

それでは、情報処理学会が単独で国際会議を開催できないかということ考えたが、学会全体で行うのは大変なので、まず、研究会レベルで国際会議を企画してみることにした。

というのも、世の中の流れは、その昔のFJCCとかSJCCといった情報処理全体をカバーする国際会議は、焦点がぼけ、技術的に深入りすることができないこともあり、分野に特化したかたちで研究集会を開催するのが時代の趨勢になってきたからである。

関係者と相談して、研究会で対応できるかたちで、国際会議を開くことが、情報処理学会の将来の大きな流れになるかと思い、焦点を絞ったかたちで、国際会議を開くこととした。

現在、私の知っているところでは、ソフトウェアエンジニアリング、セキュリティ、グループウェア、モバイルコンピューティングなどの分野において、日本が主導的な立場でかなりの国際会議が開催されるようになった。

以下、実際に情報処理学会が主導的な体制をとり、開催しているICMUとCollabTechについて、その活動内容を紹介する。

---

## ICMU

---

携帯情報機器、コンピュータネットワークの発展により、いつでもどこでも情報を発信したり、受信、検索することができるモバイルコンピューティング環境が発展することが予期され、それに対応するために、1997年にモバイルコンピューティング(MBL)研究会が設立された。MBL研究会は、モバイルコンピューティングに関して、基礎となる理論・技術、通信プロトコル、コンピュータアーキテクチャ、オペレーティングシステム、アプリケーション、応用事例、管理運用、さらに社会科



図-1 第1回ICMUバンケットの様子

学的考察などについて研究していくことを目指している。

モバイルコンピューティングの分野においては、技術革新が驚くべきスピードで発達している。これに対応するように、IEEEを中心に、いくつかの国際会議が頻繁に開催されるようになってきた。さらに、MBL研究会においても、年々研究会員数が増え、現在450人を超すようになってきた。発表件数が増加するとともに、技術レベルも高くなってきている。

当然の流れとして、「この分野の情報発信を日本からやるべきである」となってきた。その対応として、IEEE等の国際会議を誘致する方法も考えられた。しかしながら、それは単年度のものであり、継続的に日本からの発信をすることができない。

そのような考えもあり、モバイルコンピューティングに特化する国際会議を我々情報処理学会が主催することとした。その名前も、International Conference on Mobile Computing and Ubiquitous Networking: ICMU (モバイルコンピューティングとユビキタスネットワーク国際会議)とした。

ICMUは、モバイルコンピューティングおよびユビキタスネットワークに関する最新の研究成果を発表し、世界各国の研究者が活発に討論する場を提供することを目的とする。対象とする分野として、モバイルコンピューティング用アプリケーションとサービス、ユビキタスネットワークのためのネットワーク、プロトコル、ネットワーク管理技術、セキュリティ技術に関する理論的および実践的研究がある。これらのテーマは来るユビキタス社会を支える重要な基礎技術であり、本会議の開催は情報通信分野の発展に大いなる貢献を目指している。

第1回は、2004年1月8～9日横須賀NTTドコモR&Dセンターで、私と高橋修 MBL 主査(当時) 実行委



図-2 第2回ICMUパネル討論

員長の下で開催された。

そのときに、益田会長から、メッセージをいただいた。図-1は、そのときのバンケットの光景であり、その中で、そのメッセージを報告した。益田会長からのメッセージ(記事の最後に全文を紹介する)にあるように、ICMUは、情報処理学会における単独の主催の国際会議であり、日本だけでなく、海外でも開催することとし、第3回は、海外で行うことを目指すこととした。

第2回は、2005年4月13～15日、大阪大学コンベンションセンターで、KDDI 研究所会長の平田康夫 実行委員長の下で開催された。図-2は、そのときのパネル討論を示している。

第3回は、図-2のパネル討論に参加していただいた Toh 教授を実行委員長にお迎えして、2006年10月11～13日、BCS (the British Computer Society) London Office, London, U.Kで開催した(図-3, 図-4)。

海外での開催の課題は、主催をどうするかであった。イギリスで国際会議を開催した場合、一般的な慣習では、国際的な組織であれば、国際的な組織が主催で、国内組織で共催をというかたちになる。

ここで、問題はJ(日本)の付いたIPSJが、ロンドンで開催するのに、地元の協力を得ることができるかであった。ICMUは、IPSJが主催するというのが設立の目的であったので、いろいろ折衝の結果、次のようなスポンサーシップとした。Toh 実行委員長の多大な貢献に負うところが多い。

Sponsor : IPSJ SIG-MBL (Information Processing Society of Japan, Special Interest Group of Mobile Computing and Ubiquitous Networking)

Technically Co-Sponsored : BCS (British Computer

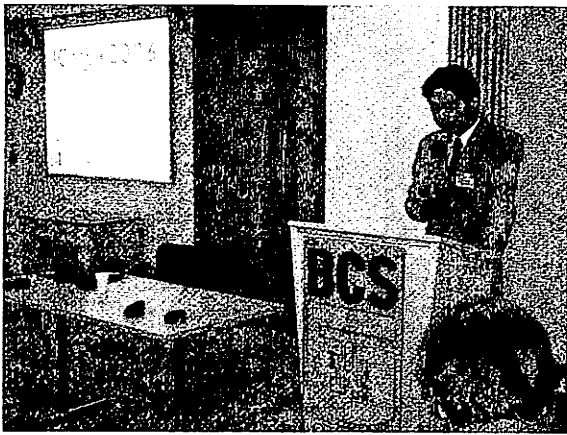


図-3 第3回ICMU開会式(ロンドンBCSにて)



図-4 第3回ICMU会議様子(ロンドンBCSにて)

Society), IET (The Institution of Engineering and Technology), IEEE Intelligent Transportation Systems Society, Technical Committee on Mobile Communications & Applications

Supporter : ICF (International Communications Foundation) and SCAT (Support Center for Advanced Telecommunications Technology Research, Foundation)

Company Sponsor : Mitsubishi Electric Information Technology Center Europe

## CollabTech

2005年7月15～16日、東京江戸東京博物館において、GN(グループウェアとネットワークサービス研究会)の主催で、コラボレーション技術に関する国際会議が開催された。国際会議の名称は、International Conference on Collaboration Technologies(略称: CollabTech)である。

情報処理学会では1991年にグループウェア研究グループが、それを引き継ぐかたちで1993年にグループウェア研究会が設立されており、協調作業支援(CSCW)、グループウェア分野の研究活動の相当の蓄積がある。さらに2001年には研究分野の拡大発展に応じて、グループウェアとネットワークサービス研究会と名称変更して活動している。

CSCW/グループウェア研究にはテクノロジー開発的側面と分析的側面の両面からの研究が必要であると言われている。しかし、欧米のCSCW関係の国際会議では後者へ偏る傾向が強い。一方、アジア地域のCSCW研究はテクノロジーの面で優秀な研究が多いに

もかかわらず、分析的側面の不足や、英文が不得手であるなどの理由で採択論文が限られている。これは、CSCW/グループウェアの分野全体の発展にとってマイナスである。

そこで、本国際会議は、新規的なテクノロジーに関する研究論文の積極的な投稿を呼びかけることによって、優れた研究に英文で発表する機会を与え、さらには欧米の国際会議に進出するきっかけを与えること、また、これによって、欧米の研究の流れを修正することを目指して開催された。第2回は、2006年7月13～14日、筑波大学春日キャンパスにおいて開催された(図-5)。この国際会議では、研究会による主催という特長を活かして研究分野に特化した内容をベースに参加者間の十分な相互交流がなされている。また、主要な海外研究者にはInternational Advisory Board Memberとして協力を求めることによって、それが海外における本会議の認知を高めることにつながっているという特長がある。

第3回は2007年7月12～13日、韓国での開催が予定されている。今回IPSJは協賛という立場となっている。とはいえGNのメンバが会議の運営に参加しており、海外での円滑な会議運営のためには、こうした体制も1つの方法であろう。スポンサーシップについてはいろいろ課題も多いが、IPSJが主導的な役割を果たすことによって、同研究分野における特徴を保ちつつ、より多くの国々が参加できる国際会議として真に国際的な会議への発展を目指している。

## 提言

情報処理学会単独主催の国際会議事例を紹介した。そこで、IPSJが日本を対象とした国内組織ということをも

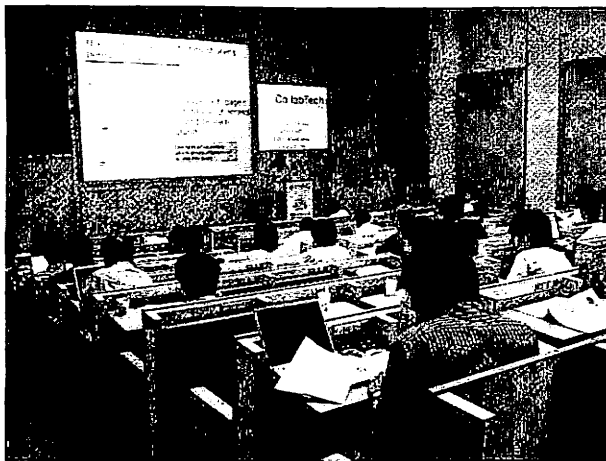


図-5 第2回 CollabTech

実感した。IPJSJ から J をとるだけで、かなり仕事がしやすくなることも率直な感想であり、提言したい。IPJSJ から、単に J をとれば、グローバルな組織になるとは当然あり得ないが、グローバルな環境で情報処理学会が生きていくためには避けて通ることができない道であると思われる。いくつかのハードルを乗り越え、世界の中で生きていけることがこれからの情報処理学会であると思う。

最後に、本稿執筆に関して、益田前会長にはメッセージ掲載に関して快諾していただいた。さらに、MBL 研究会および GN 研究会の関係者には多大な情報をいただいた。ここに謝意を表する。

#### 【益田会長(2004年)から ICMU へのメッセージ】

Congratulatory Message for ICMU 2004 from Takashi Masuda, President of the Information Processing Society of Japan (IPJSJ).

First of all, I would like to express my delight that the First International Conference on Mobile Computing and Ubiquitous Networking. I believe that Japanese expertise is relatively stronger in fields such as mobile computing and networking. With over 24,000 members, IPJSJ is the largest scientific society for information technology in Japan. Over the years, it has been very active domestically. However, while IPJSJ has cosponsored international conference together with the Institute of Electrical and Electronics Engineers (IEEE), such as the International Symposium on Autonomous Decentralized Systems (ISADS) and the Symposium on Applications and the Internet (SAINT), it has rarely

been the sole "main" sponsor. In that respect, ICMU 2004 is also an extremely valuable experience for IPJSJ; I hope that the conference will be a great success.

In this international conferences, over half the published papers come from countries other than Japan; therefore, the conference can truly be called an international event. I firmly believe that by taking the initiative to host conferences like this one, IPJSJ can pursue research activities from a global perspective. I recently became aware of the plan to organize the 3<sup>rd</sup> ICMU outside of Japan. I believe that the success of this year's conference will provide a huge boost to and momentum for ICMU conferences in the years to come.

Professor Tadanori Mizuno, the General Co-Chair of ICMU 2004, was kind enough to invite me to the conference and the banquet. However, many national university administrators like me are currently busy with the implementation of institutional reforms that are necessary for transforming national universities into independent administrative institutions by April this year. Unfortunately, at the time of the banquet, the faculty that I am in charge of will be busy with preparations and meetings related to the upcoming transformation. I will, therefore, be unable to attend both the banquet and the conference. For this reason, I would like to entrust the responsibility of delivering the congratulatory message to Professor Mizuno.

Finally, I would like to say something to all the overseas visitors. The New Year's season in Japan is very cold, but in various places you can experience New Year's events. In addition, not far from Yokosuka and the conference venue lies the ancient capital of Kamakura. If you have the chance, I insist that you take some time off from your busy schedule and enjoy Japanese New Year festivities and the traditional culture.

(平成 19 年 2 月 15 日 受付)

水野 忠則 (正会員)  
mizuno@mizulab.net

1945 年生、1969 年名工大経営工学科卒業、同年三菱電機(株)入社。1993 年静岡大学教授、2006 年創造科学技術大学院長、工学博士。情報ネットワーク、モバイルコンピューティング等研究に従事、本会フェロー、監事。